

# 再び動きだした山

木材の生産量は、昭和30年代をピークにおよそ4分の1にまで落ち込んだ長い低迷が続いてきた日本の林業に復活の兆しが見え始めた

未来の建築材料と言われる  
CLT（直交集成板）  
新たな建築用材の普及が  
林業の未来を変える

日本の建築業界を変えると期待される、CLT（直交集成板）と呼ばれる集成材があります。ひき板の繊維が交差するように張り合わされた集成材パネルのことで、壁や床を「面」で支えるため、コンクリートに比べて軽量で、耐震性にも優れた「夢の木材」とも言われています。国内でCLTの認定工場は9カ所、県内では、ここ肝付町の山佐木材株式会社1カ所のみです。「先日、錦江町田代の山から伐り出した丸太約2,000m<sup>3</sup>のうち、7割はCLTに使います。CLTは、これまでの集成材や2×4材などとは違い、「線」ではなく「面（パネル）」で構造を支える集成材で、木造では不可能とされて

いた、中高層ビルや大型商業施設などへの利用が期待されています」そう話すのは、山佐木材製材部の森田悠介さん。林業の先進国、ヨーロッパではCLTが普及し、実際に10階建以上の中高層ビルなどが木造で建てられています。最近では、日本でも高層建築物の床材や壁材に使われ始めています。「コンクリートは施工して養生（固まるまで待つ）すると2週間程かかるのに対し、CLTならパネルの設置だけで、施工期間が約3日と大幅な工期短縮ができます。人手不足解消にも一役買うのでは」と期待を込めます。CLTを始めとした木材が、新たな建築用材として普及すれば、国産材の需要拡大により、林業全体の活性化、森林資源の循環にもつながります。「日本でもCLTで中高層ビルを建設できる日を夢見ています。木材の新たな活用を見出すことができれば、山を荒らすことなく、森林資源の循環に貢献できるはずですから」と未来を見つめます。

CLT（Cross Laminated Timber）の略称



バイオマス発電  
や海外輸出で木  
材需要は増加。  
伐採と植林のバ  
ランスが森林資  
源循環の鍵

「あのトラックも志布志港行きた。これで今日は2往復目だな」そう言いながら市場の事務所から出てきたのは堀内幸弘さん。伐り出された木材を製材所などに販売する、高山木材流通センター（県信連）の所長です。近年は、木質バイオマス発電の燃料や、中国への木材輸出などで取引が年々増え続けており、特に曲がり材や傷材などの、いわゆる低質材（規格外）の需要が増えているそうです。「中国では、大型機械のコン包材やフェンス用材に加工して利用されています。以前なら山で捨てられていた木も売れるようになりまし。私たちがC材と呼んでいる低質な木材は、以前なら1m<sup>3</sup>5千円を割り込んで

いましたが、今では7千円を下回ることはないですね」と話します。こうした中国での需要増加によって、志布志港からの木材輸出は増え続けています。昨年の原木輸出量は37万m<sup>3</sup>を超え、木材輸出量で9年連続の日本一となる港にまで拡大しました。「木の伐採が進み資源が循環することは喜ばしいことですが、それは伐採後の植林があつてこそ。スギやヒノキの伐採跡地は、タブやカシなどの雑木と違って天然更新が難しいので、苗木を植えずに放置してしまうと山が荒れてしまう。そうなると山が本来持っている保水機能が失われ、地すべりや土砂災害などを引き起こすことに」と伐採と植林の重要性を訴えます。



平成13年に山佐木材へ入社。製材部で仕入れや原木調達を担当し、大隅半島全域の山に向かっている。池田川南自治会で妻と3人の子とも暮らし38歳。



CLTの端材で作ったペン立て  
KINKO TOWN PUBLIC RELATIONS 2019.6

接着して乾燥後に整形機械でカット

CLTと2×4材で作ったプレハブの部屋